

ノコギリヤネとモダニズム建築

(断章“ノコギリヤネのある風景” その13)



▲ノコギリヤネ全盛期の墨会館。東側に工場、後方に総合研究所(出典：文化財ナビ愛知)

「国際芸術祭・あいち 2022」の終盤、ガチャ万との縁浅からぬ二つの展示会場を訪れた。国島株式会社と艶金興業の旧本社・墨会館である。

国島は、古い歴史を持つ毛織メーカーであり、尾州ブランドを担う地域の有力企業である。一方、墨会館を本社としていた艶金興業は、明治時代に創業し、染色整理加工業で地域経済を牽引してきたが、2010年に繊維事業から撤退した。墨会館は国の有形文化財に登録され、一宮市に譲渡された。

墨会館は代々木競技場や東京都庁舎等の設計を手がけた建築家・丹下健三の愛知県下唯一の建築として注目されがちであるが、実は、高度経済成長時代、艶金の企業として発展する節目となる建築を他にも設計している。

それは、この地域の代名詞でもあるガチャ万と、機能的、合理的な造形理念に基づくモダニズム建築が融合した「ノコギリヤネのある風景」でもある。

コンクリートの外壁で囲われた墨会館は、まさに要塞のごとき佇まいである。それは、周辺の多くの工場、トラックの出入り等の立地条件を考慮したものといわれる。内側には、中庭を囲んで事務所、集会室等が配置されており、これは「園遊会ができるようなフラットな芝生の庭」という施主の希望から生まれたものといわれる。

中庭というカタチで設えられた「からっぽ」。その場所は、尾州の繊維産業の発展を牽引した一企業の礎が築かれた「創業の地」であった。「からっぽ」からガチャ万とモダニズム建築の物語が始まる。

ノコギリアン（神奈川県藤沢市在住／のこぎり二にノコギリアン・コウバを主宰）

1. ガチャ万とモダニズム建築

国際芸術祭の会場に足を踏み入れたはずなのに、また、時空の狭間に迷い込んでしまったのか。あるいは、例の白昼夢か。中庭から賑やかな声が聞こえてくる。この建物の落成を祝う園遊会が催されているらしい。しかし、そのような催しの記録はなかったように思う。

こちらに向けられた鋭い視線を感じた。一本の松の木に、華やかな場に不釣り合いな一羽のカラスが止まっている。どうやらこの真昼の幻想はマスミダカラスの仕業のようだ。

相変わらずだな、マスミダカラス。中央で二人の男性が談笑しているが、蝶ネクタイの紳士がくだんの建築家で、もう一人がお施主の社長というわけか。なかなか手の込んだ舞台設定じゃないか。世界的建築家は思ったより小柄だな。さて、これから、何を見せてくれる。

高度経済成長を舞台にして、中核的な地方の一企業が世界に名を馳せる建築家の設計に託した企業展望の顛末といったところか。いわば「ガチャ万とモダニズム建築」と題する喜劇かな。まずは、時間と風景を俯瞰して見せてやろう。

そして、マスカラスコープ（マスミダカラスが映し出す映像）は、中庭の園遊会から視点を上昇させ、上空からの眺めへと移行した。

墨会館の誕生は1957年。「世界のタンゲ」の初期を代表する建築の一つである。旧東京都庁舎をはじめ、公共建築でモダニズム建築の騎手として名を馳せるようになる。それと呼応するかのよう、ガチャ万、経済成長の波に乗り、墨会館を本社とした企業は大きく躍動する。



▲ 高度経済成長時代の墨会館（空中写真は1970年代）

2. 「ツヤキン・ロード」と「タンゲ・ロード」

マスカラスコープはその成長過程を映し出す。企業の中核は、墨会館を起点にして南北に伸びていく。1976 年、社長の自宅を挟んだ北側に、技術研究所であり古今の毛織物資料を保存する“白亜の殿堂”と呼んだ墨総合研究所が、丹下の設計によって竣工する。

そして、1988 年、墨会館の南側にツヤキンセンタービルが立ち上がる。グループ各社の情報の集中管理を行うとともに、繊維の物流、生産管理、品質管理の情報を蓄積し、業界の発展を目論んだ。丹下の建築で構成される約 300 メートルにおよぶ「ツヤキン・ロード」が誕生した。皮肉にも、それは墨会館と東側の工場による閉鎖的な壁の連続する空間、まさにウォールストリートでもあった。しかし、人が交流する街の発祥となる「ストリート」とは異なっていた。

一方でタンゲは、1970 年に開催された大阪万博のお祭り広場で名声を得て、中東諸国の首都建設等、活躍の場を海外へと展開していった。「タンゲ・ロード」とでも呼ぼうか。

そして、国内においても、世界都市博を目論んだ東京テレポート構想、東京都庁舎の新宿移転につながる新宿副都心構想など都市スケールに照準を置いていた。東京都庁舎が竣工した 1990 年、艶金は創業 100 周年を迎えた。絶頂期であった。ガチャ万地方都市の一隅で「タンゲ・ロード」と「ツヤキン・ロード」が交錯していた。

艶金の百周年記念式典は、一宮市民会館、ナゴヤキャッスルで盛大に催されたという。マスカラスコープは静まり返った墨会館の中庭を映し出している。そして、直後に訪れたグループ牽引者の死。バブル経済の崩壊。産業構造の転換。さて、この道はどこに向かうのだろう。



▲ 艶金が繊維業から撤退する前（2000 年代）

3. 要塞が守ったもの

マスカラスコープが映し出した墨会館の現在。

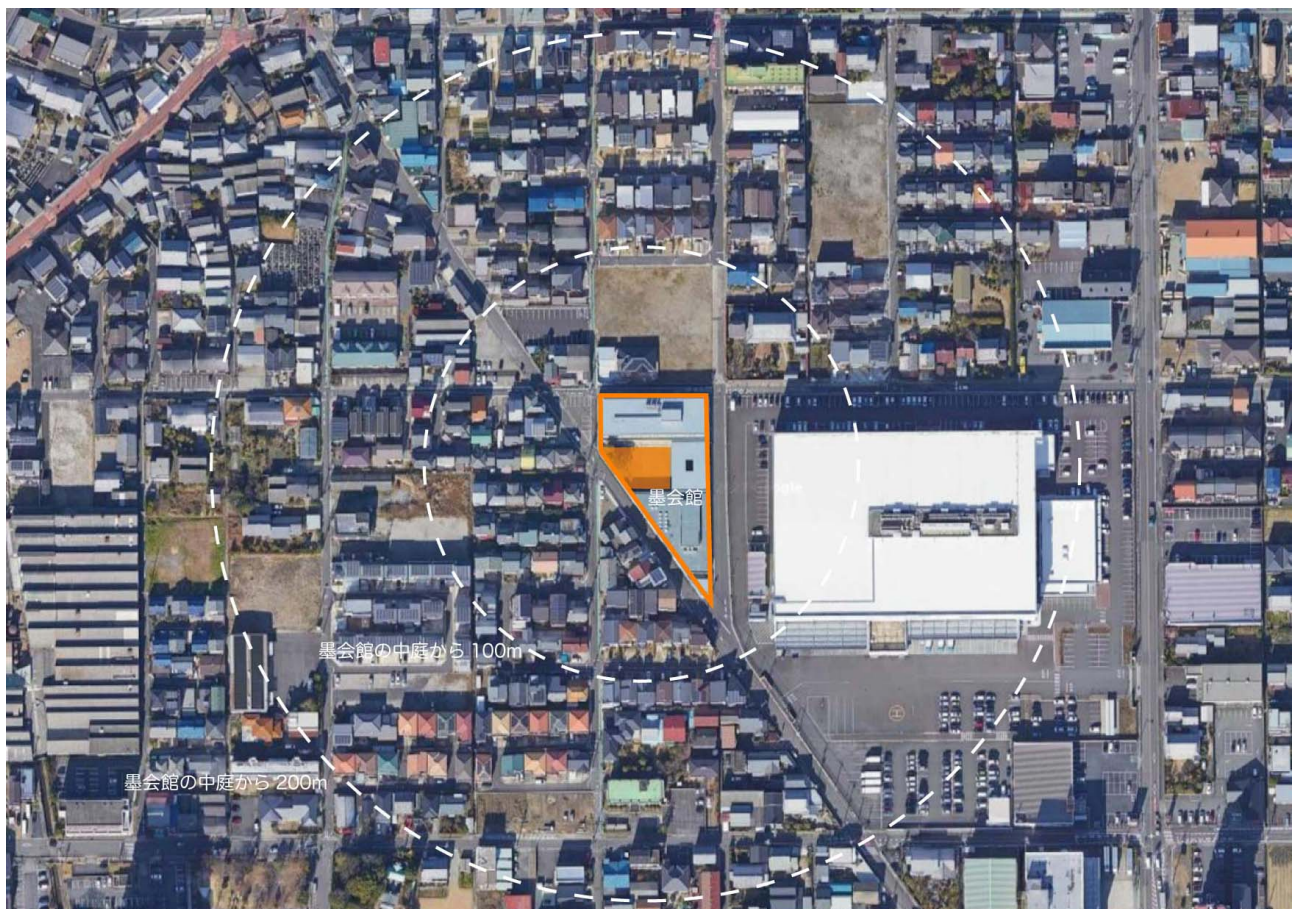
2010 年、艶金はこれまでの繊維事業から撤退し、この創業の地を後にした。工場は物流センターに変わり、研究所もセンタービルもなくなった。唯一残ったのが墨会館である。それも、一宮市に譲渡され、いまは文化財として保存され、一部は公民館として利用されている。そして、国際芸術祭「あいち 2022」の会場となった。

ツヤキンロードの起点となったこの記念碑的な建築だけが残ったということか。結局、砦だけが残った。外に閉じ、内に開いてデザインされたモダニズム建築か。ひ弱なモダニズム建築をこの要塞のような壁で守ったということだろうか。

そうだとすれば建築家の知恵の勝利だな。でもオレの見方は違う。外壁が守ったのは、建築ではなく、中庭というカタチの「からっぽ」だったのさ。そこは、創業者の「地霊」が眠る聖域だった。

要塞は、お墓だったということか。市街地の中にお墓をつくった。その力で企業が大きく発展した。栄枯盛衰を経て、かつてこの地域の繁栄を担ってきた一つの企業の記憶が眠っている。

しかし、たった 50 年の間に、まちの風景はこれほど変貌するのか。丹下の建築が彩ったツヤキン・ロードには栄華の面影もなく、ノコギリヤネのある風景は、ありふれた住宅地へと様変わりだ。ガチャ万とその後の景気変動を生き抜いたのは、「中庭という日常」なのかもしれない。



▲ 艶金撤退後（現在）

4. 名もなきモダニズム建築

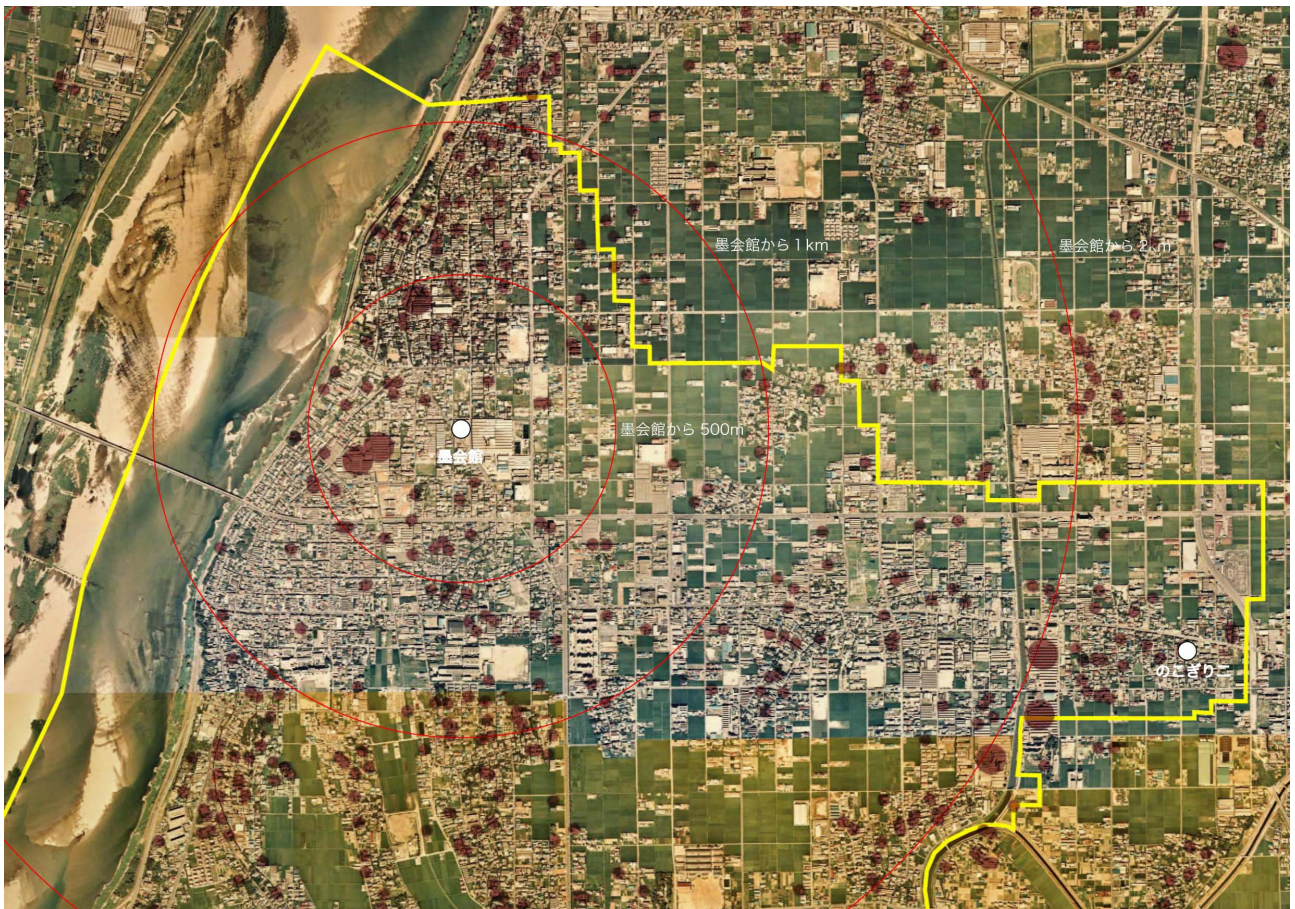
突如、マスカラスコープが高度を上げ始めた。みるみるうちに視界が広がってきた。眼下に地域一帯に残る多くのノコギリヤネが浮かび上がる。一瞬、50年前の風景が差し挟まれたように見えたのは、マスミダカラスのユーモアだろう。

まだこんなにいっぱいあるじゃないか。お前が「からっぽ」に例えた創造の源泉が。創造はアートや芸術だけじゃない。むしろ、平凡な日常の生活、暮らしの中でこそ生きてくるものだ。

丹下が設計したモダニズム建築。モダニズム建築が合理性、機能性を造形理念とするならば、ノコギリヤネだってモダニズム建築じゃないか。イギリスで生まれ、この国で木造の伝統構法と融合して、そして地方の名もなき大工たちが独自の合理性、機能性を工夫したコウバダ。

モダニズム建築は、西欧建築の石や煉瓦による重苦しい古典様式に対して、開放的な空間構成のアイデアを日本の伝統様式に見出した。ノコギリヤネは、自由な空間、内と外の連続性を持っていたが、多くが閉じてしまった。再び開くために何ができるだろう。

また、カラスの浅知恵と言われそうだが、オモテとナカをひっくり返してみるというのはどうだ。ウチとソトを。ある学者が言うには、動物の内臓である腸の管をひっくり返したものが植物の茎であり、それは、宇宙に開き、太陽につながるカタチであると。墨会館の中庭でひっくり返してみる。オモテにモダニズム建築の端正な顔が現れるだろう。からっぽのノコギリヤネは中庭と同じだ。ウチとソトをひっくり返してみたらどうなるかな。



▲ ノコギリヤネの残る起地区（1970年代の空中写真に現在残るノコギリヤネを重ねる）

○エピローグ：モダニズム建築その後

建築を志す一人の青年が、墨会館について、「過去の人だから…」と言葉を濁したと人づてに聞いた。40年以上も昔のことになるが、私の周りの建築学科の学生の間では、その名声に反して、建築家／都市計画家としての丹下健三の人気はあまり芳しいものではなかった。デザインよりも政治や権力とつながった建築家のイメージが強かったのかもしれない。

東京オリンピックの年（1964年）、丹下は国立代々木競技場、東京カテドラルなどの大構造建築を手がけ、世界的な名声を得るが、この年、羽島市に艶金の「理想の工場」を設計している。細長い直方体の工場は、全長263mの戦艦大和と同じ大きさを誇り、空調管理された建物には窓はない。工場内の作業場全体が見渡せる集中管理室が2階に設けられ、機械のスピード、温度設定などが自動でコントロールされる最新鋭のシステムが装備された。現在、倉庫に用途を変えながらも当時の外観を留めている。

それに先立つ3年前、艶金グループは新会社の工場建設を丹下に依頼している。多忙を理由に設計は丹下に縁のある事務所となったが、ここで無窓の集中管理方式が試みられている。モダニズム、丹下の設計思想と艶金グループの企業としての思惑が時流とシンクロしている。

墨会館の竣工は1957年。奇しくも私と生年が同じである。建築は鏡のように時代、社会を映し出す。丹下健三というまさに高度経済成長の時代を象徴した建築家が、ガチャ万、ノコギリヤネの地方都市で建築を手がけた。それらは、ガチャ万とからむ企業の興亡史を彩った。丹下健三という「過去の人」を通して、ノコギリヤネというテーマがさらに広がりを持ってきたように思う。「モダニズム建築としてのノコギリヤネ」もその一つだ。モダニズム建築に関連して、「近代建築の五原則」なるものがある。ノコギリヤネと重ね合わせると実に面白いことが見えてくる。別稿を起こすつもりである。

最後に、告知をひとつ。マスミダカラスの口車に乗せられて、「ひっくり返す墨会館」という工作をする羽目になった。ついでにノコギリヤネも裏返して見た。今月半ばから開催予定の「ノコギリヤネ・ガッカイ2022」（場所：ノコギリヤネ・コウバ、日程：2022.12.15～2023.1.19）で展示の予定である。時間と好奇心にゆとりある方は、ご笑覧あれ。

2022.12.2（小雪・橘始黄／しょうせつ・たちばなはじめてきばむ）



▲ 羽島市に残る「理想の工場」（Google ストリートビューより）